

## 【漢検研究奨励賞】佳作

### 「杣」という字について

東海高等学校1年 西嶋 佑太郎

#### 1.はじめに

漢字は、中国で生まれて日本に伝わったものである。漢字は中国の影響を常に受けながら、時代とともに変化してきた。その中で、中国とは異なる文化を持つ日本では、漢字を応用するという形で国字を創作していった。現在、日本人の漢字表記は常用漢字表によって制約を受けている。しかし、地名などの固有名詞にはこれはあまり関係のないことであり、地名に使われる国字は将来的に使い続けられる可能性がある。

私の住んでいる愛知県には、「杣」という字のつく地名が数多くある。しかし、他の県に住んでいる人に尋ねてみても、この「杣」を見たことがないと言う。私は、この「杣」という字に興味を抱き、この字とこれに関連するところからの歴史と分布について調べることとした。

#### 2.「杣」とその関連する字の意味

ここでまず「杣」と、「杣」に字形や意味の上で関連のある字について、その意味について調べてみた。

##### 2-1.「杣」

まず『大漢和辞典』補巻を引くと、

(国字)いり 坪とも書く。杣江・杣山は姓。杣ヶ島・杵杣町は愛知県の地名。

[和字正俗通]杣、イリ。

とある。「杣」は、「木」と読みを表す「入」からなるという構成をしている。

では、そもそもこの「いり」とは何なのか。『国史大辞典』の「いり」の項目を引くと、

樋の口のこと。人工の用水路に水をとり入れるため、井堰の少し上手のいすれか一方の河岸に設けた多くは木造、稀には石造の樋門である〔中略〕その規模によって一枚戸、二枚戸、三枚戸などがあり、必要に応じて開閉し、水量を調節できるようになっている。

とあり、また

尾張では慶長十三年(一六〇八)伊奈備前が木曽川から引水する丹羽郡の般若に設けたのが杣樋の始まりと伝え、尾張真清田神社の大工二人を大和と播磨に派し伝習させた技術という。杣の工法が早く上方に発達していたことを示すであろう。

とある。この尾張の地には古くから灌漑の技術が発達したことが伺える。ほかにも、『日本国語大辞典』第2版1巻には方言として、

- ①水をせきとめて逆流を防ぐ水門。岐阜県本巣郡
- ②水門のある所。樋口(ひぐち)。愛知県東春日井郡

とあり、いかにこの地方に染み付いた言葉であるかがわかる。先の「和字正俗通」を編纂した山本格安も、尾張出身の人であった( 笹原宏之『国字の位相と展開』)。

## 2-2.「杔」

先の『国史大辞典』や『日本国語大辞典』において、「杔」の字よりも先に挙げられていたのがこの「杔」という字である。「杔」と比べると木偏か土偏かの違いである。

「杔」も国字であるが、字形の変化の過程から見れば、まず「杔」の字ができる、それを「いせき」の歴史的表記である「堰」から土偏の「杔」に改めたと考えるべきである(『国字の位相と展開』)。この「杔」は愛知県だけと言うわけではなく、和歌山県など(杔一和歌山市『新日本地名索引』)にもその用例を見ることができ、「いり」という言葉に対する一般的な漢字として定着したものと考えられる。

## 2-3.「杔」

「杔」に形がよく似た字として、「朳」という字がある。見た目がほとんど同じであるため、混同が起こっている。福岡県遠賀郡水巻町朳(えぶり)はその例で、字形は「杔」とされることもあるが、読みからみると「朳」となるところである。「朳」とは『漢語林』によると、

音ハツ・ハチ　えぶり。さらい。土をならしたり、穀物などをかき寄せる農具。=捌  
[朳]とは別字。

とあり、「朳」とは明確に区別されている。しかし、「杔差岳(えぶりさしだけ)」(新潟県)(エツコ・オバタ・ライマン『日本人の作った漢字』)、「杔　はつ　6画」(『苗字8万よみかた辞典』)など「杔」を「朳」と混同するものは多く見受けられるが、「朳」を「杔」と混同する例はほとんどないようだ。福岡県遠賀郡水巻町「朳(えぶり)」や「杔差岳(えぶりさしだけ)」は、いずれも正式には「朳」となっている。

## 3.「杔」の付く地名

「杔」の字には、「杔」(いり)の意味で、先に『大漢和辞典』を引用したように、地名にも多く使われている。その使われ方や分布について調べてみた。

### 3-1.日本における分布

冒頭でも述べたように、「杔」の付く地名は愛知県に集中している。愛知県でないものは、

『現代日本地名よみかた大辞典』や『国字の位相と展開』によれば、数えるほどしかなく、福岡県遠賀郡水巻町杣、新潟県岩船郡関川村杣差岳(前述のとおりこれらは「えぶり」)、そして岐阜県、三重県、長野県に数か所あるくらいである。

また尾張藩では、「杣」を「塙」にするというお触れも出されたことがあったが、それでも習慣が根強く残った(『国字の位相と展開』)。

### 3-2. 愛知県における分布

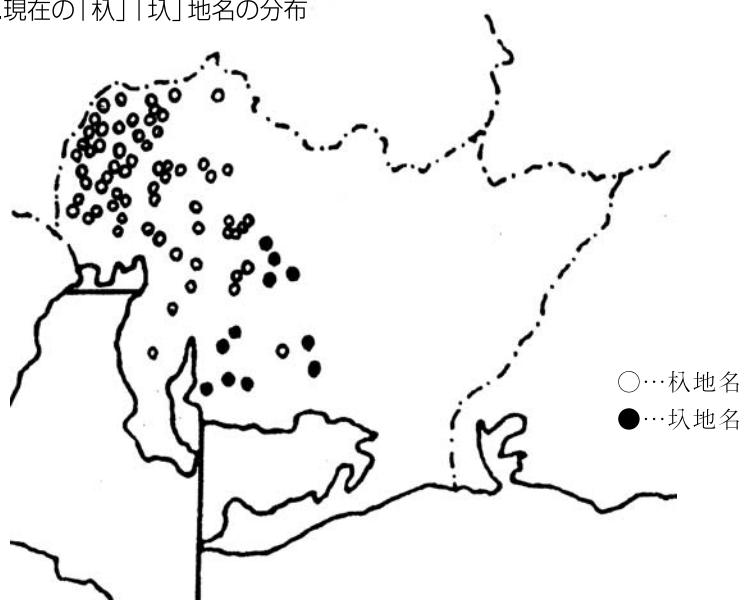
次に『新日本地名索引』『難読・異読地名辞典』『難読姓氏・地名大辞典』『角川日本地名大辞典』『現代日本地名よみかた大辞典』を資料として、「杣」の愛知県においての分布を見てみると、きれいに愛知県西部、特に県境付近に集中している。

ここで、「塙」の付く地名の分布も見てみる。「塙」も日本においては「杣」と同じように愛知県に集中している。さらに愛知県の中での分布を見てみると、「杣」とは異なって愛知県の中部から東部に集中している(図1)。またその境界線は、尾張藩と三河藩との境にはほぼ一致する。これについて、笛原宏之「地名と漢字」(『朝倉漢字講座3 現代の漢字』)によると、

[杣]は、地名や姓にも使われているが、尾張藩で文書や文献に多用され、幕府の[塙]と異なる分布を呈する。

とある。尾張藩の中では、「いり」に対する漢字として「杣」が普通名詞のようにしても使われていたようだ。

図1.現在の「杣」「塙」地名の分布



これと比較するために、『愛知県地名集覧』に掲載されている「杣」「塙」地名の分布を見てみる。『愛知県地名集覧』にある地名は、現在使用されている地名より古い地名が含まれるので、図1と多少異なる分布を呈する(図2)。

図2.『愛知県地名集覧』における「杣」「塙」地名の分布



「杣」についてみると、中島郡(現一宮市、稻沢市)、海東郡(現津島市)、愛知郡(日進市、長久手町)に多い。愛知県北西部の県境には木曽三川が流れしており、そこからの用水路の「杣」が地名の由来になったのであろう。

また「塙」については、西加茂郡、碧海郡、額田郡、幡豆郡、知多郡に存在する。中でも、碧海郡、幡豆郡、知多郡では「杣」と「塙」が混在している。このあたりが、「杣」と「塙」の境界線にあたるところであろう。北・南設樂郡、八名郡には「杣」「塙」のどちらも存在しない。これは、このあたりは山間部であり稲作を行うための用水路もそれに付随する「いり」も発達しなかつたためだろう。

そして、図1と図2を比べていると気づいた点がいくつかあった。まず一つは、現在の分布と『愛知県地名集覧』の分布での表記の差である。『愛知県地名集覧』は、原題を『明治十五年愛知県郡町村字名調』といい、そこに収められた地名は現在の地名とは多少異なる。南知多町の「杣ヶ奥」は『愛知県地名集覧』には「塙ヶ奥」と書かれており、長久手町の「杣ヶ根」は「入ヶ根」と書かれている。時代によっても表記は揺れがあるようだ。次に、「杣」という字にはほかの読みがあるということである。『愛知県地名集覧』で言うと、西春日井郡今村に「掛杣」という地名があるが、この地名は「かけこみ」と読み、ここでの「杣」は「いり」ではなく「こみ」という読みである。この「こみ」はおそらく「込」の字の影響だと思われる。また現在でも、『国字の位相と展開』によると、一宮市に「水杣」で読みが「すいり」というものがあり、犬山

市にも「桶柵」で「おけいれ」というものがある。

### 3-3.「柵」の付く具体的な地名

それでは、「柵」の付く具体的な地名を見てみる。まず、図1において尾張藩域の中でも特に「柵」地名が集中していた、名古屋市、一宮市(旧尾西市、旧葉栗郡木曽川町を含む)、春日井市、愛知郡長久手町における地名を取り上げる。

#### 3-3-1.名古屋市

ここでは、名古屋市千種区田代町「瓶柵」を取り上げる。この「瓶柵」は名古屋市の中でも瀬戸市のほうに近い場所にある。それもあってか、古墳時代から陶器の産地であった。これによって、「瓶」はここが「瓶」の生産地であったことを示している。それでは「柵」はどうか。「柵」があるということは、近くに河川か池沼があるということであり、実際に近くに河川も池沼もある。つまり、この「瓶柵」は、瓶の生産地で柵の近くにある陶器の洗い場という意味であろう(名古屋市ホームページ)。

#### 3-3-2.一宮市、犬山市

一宮市は、愛知県北西部の木曽川沿岸に位置し、先の2-1柵で述べた尾張真清田神社の門前町として栄え、現在は毛織物工業の中心地である。図1・2を見てもわかるとおり、「柵町」「丹陽町伝法寺字柵先」など、「柵」地名が最も集中している地域である。これは、木曽川の豊富な水によって稲作が栄え、それと同時に灌漑設備も発達して「柵」も多く作られて、今に残っているものであろう。

先の2-1柵で述べた般若に設けられた柵「大野柵」以来、次々と「柵」が設けられた。そして、尾張の用水のほとんどが取水口を一宮市の木曽川沿岸に持ち、「柵」地名が増加したのである(図3・4)。

図3.尾張の用水

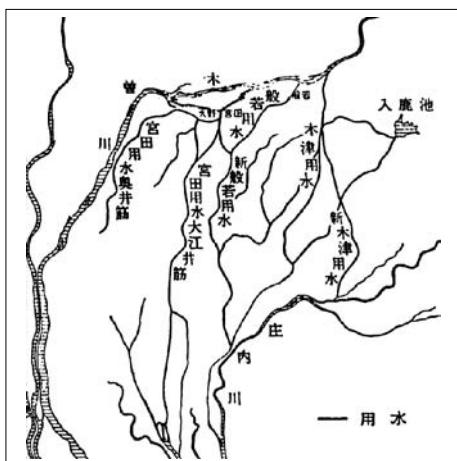


図4.尾張の六大用水

名 称	井 高 (かんかいで高)	成 立 年 次
勝川通	14117石	
稻生柵	33632石	
宮田柵	129381石	大野柵 1609年 宮田へ移築 1628年
般若柵	33631石	宮田東柵 1642年 般若用水 1619年 新般若用水 1790年
入鹿柵	15158石	
木津柵	58250石	大井堀 1632年 木津用水 1650年 新木津用水 1664年

図3・4とともに『犬山 中学校社会科資料集』による。

図5.入鹿閘（『尾張名所図会』による。）

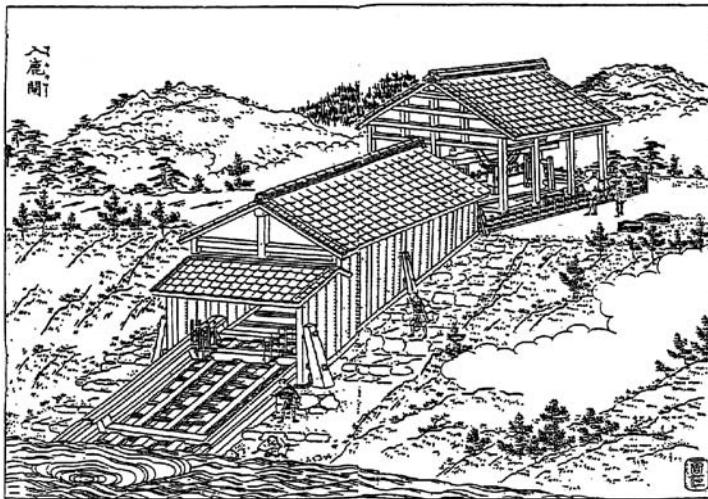


図4の入鹿杅は、犬山市の入鹿池を水源としている。取水口である「入鹿大杅」については、江戸時代の『尾張名所図会』にも、

池の南の方、神尾新田にあり、池水を當郡及び春日井郡に引きて、田圃の堰水とす。此杅は世に珍しき製作にて、大造なる事言語に述べがたし。長さ十八間、横五十四間、うちの幅二間餘、高さ二間餘、十三扉をしてかけ置き、輶轤もて其扉を上下する。俗に第十三の扉をあぐれば、其水國中に充满すといへり。堤の濶さ七十五間東西九十三間あり。世人無雙の壯觀とす。寛永十年酉二月、池と同時に製造して、國中第一の大杅なり。

とある（図5、閘は杅の意）。

### 3-3-3.愛知郡長久手町

愛知郡長久手町は名古屋市の東に隣接している。すると、木曽川からの数々の用水は通っていないことになる。しかし、分布を見るとこの愛知郡長久手町に「杅」地名が集まっている。これはどういうことなのだろうか。実際に現地に行ってみた。

「杅ヶ根」「杅ノ洞」「松杅」「溝ノ杅」の四つの「杅」地名が存在する大字熊張は、愛知万博の会場のすぐ真北にあり、一面の水田地帯である。このあたりは標高も高く、目だって大きな川もない。現在のような水田地帯になるまでには長い年月がかかったと思われる。『長久手村誌』には、

地味、土色淡黒ニシテ頗ル粘ズ、其質下等ニ在ルト雖モ能ク米麦及ビ諸物ニ通ズ、灌漑其利ヲ得ズ、故ニ時々遭旱ノ患アリ

と記されている。このため、田畠の間隙を埋めるかのように幾多の雨池が作られたのである。

このことは、「近世村絵図・地図集」(『長久手町史資料篇1』)を見ても、長久手町が渴水期に備えて、水の確保に努めた様子が窺える。

このように雨池が多く作られていくにあたって、そこから水を取り入れるために「杣」が作られたのは必至である。次にこの四つの「杣」地名の由来を『長久手町史資料篇4』から引用する。

「溝ノ杣」の北端には「溝入池」がある。『村絵図五』には「溝之池」と書かれ、池から南西に流れる用水路に「溝之杣」と記され、これが字名になったようである。

杣之洞は北東から南西に開いた谷で、上下二つのため池がある。上池の下を「上杣田面」、下池の下を「下杣田面」と『村絵図五』に記入されている。これが字名の由来になったのであろう。

松杣の谷筋には目立ったため池はない。谷の奥は江戸時代に定納山であった。

杣ヶ根は東が高く、西方に向かって低くなっていて複雑な地形をしている。[中略]杣ヶ根の北西端で神明社からの水路は、大きく屈曲して西に向かっている。杣ヶ根は水の乏しい地区であった。字名の由来はわからないが、この水路に関係があるのかもしれない。

なお、この大字熊張には上記四つの地名の由来となった池が、現在でも「溝ノ杣池」「杣ノ洞上池」「杣ノ洞下池」という形で実在し、そこから用水路も幾本か発している。

このように愛知郡長久手町では、木曽川のような大河川から水を取り入れる「杣」ではなく、渴水期に備えての雨池から水を取り入れる「杣」がつくられており、それが地名として、そして地名を表記する漢字(地域性のある国字)として現在まで残っていることがわかる。

#### 4.おわりに

「杣」は単なる愛知県周辺の地域文字にとどまらず、JIS第2水準に属しており、コンピューターでも簡単に打ち出せる文字となっている。それもあってか、「杣」地名は駅名(名鉄名古屋本線二ツ杣駅、愛知高速交通東部丘陵線杣ヶ池公園駅)などにも使われ、一宮市が葉栗郡木曽川町と尾西市を吸収合併する際も全く「杣」地名を失うことがなかった。

「杣」は古くから濃尾平野の農業を陰で支えてきたものであり、水の確保のための努力の結晶とも言える。この「杣」が国字であるという面から見ても、是非ともこの字を後世まで残せておけばと思う。個々の地名については数個の市町村しか挙げられなかつたので、ほかの市町村についてを今後の課題としたいと思う。

## 参考文献

- エツコ・オバタ・ライマン(1990,10)『日本人の作った漢字』(南雲堂)  
金井弘夫(1993,10)『新日本地名索引』(アボック社出版局)  
鎌田正(2001,11)『漢語林』(大修館書店)  
楠原佑介(1999,3)『難姓・異読地名辞典』(東京堂出版)  
笹原宏之(2003,10)『地名と漢字』『朝倉漢字講座3 現代の漢字』(朝倉書店)  
笹原宏之(2006,1)『日本の漢字』(岩波書店)  
笹原宏之(2007,3)『国字の位相と展開』(三省堂)  
丹羽基二(2002,4)『難読姓氏・地名大事典』(新人物往来社)  
前田富祺(2003,10)『朝倉漢字講座3』(朝倉書店)  
諸橋轍次(2000,4)『大漢和辞典 補巻』(大修館書店)
- 『愛知県地名集覧』1969(日本地名学研究所)  
『犬山 中学校社会科資料集』1978(犬山市教育委員会)  
『入鹿池史』1994,2(入鹿用水土地改良区)  
『尾張名所図会』1981,7(愛知県郷土資料刊行会)  
『角川日本地名大辞典23愛知県』1989,3(角川書店)  
『現代日本地名よみかた大辞典』1985,5(日外アソシエーツ)  
『国史大辞典』1979,3(吉川弘文館)  
『長久手村誌』1967,11(長久手村)  
『長久手町史 資料編』1983(長久手町)  
『日本国語大辞典』2000,12(小学館)  
『日本歴史地名大系23愛知県』1981,11(平凡社)  
『苗字8万よみかた辞典』1998,3(日外アソシエーツ)

名古屋市ホームページ <http://www.city.nagoya.jp>